國學院大學学術情報リポジトリ

〔学生懸賞論文〕選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院雑誌編集委員会] メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/312

学生懸賞論文発表

第一部門（本学文学部・神道文化学部学生、別科在籍者）

佳作

伊藤　涼（文学部中国文学科四年）

何晏の政治観―玄学萌芽を考えるために―

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

入選＝本誌7月号掲載＝

髙倉明樹子（文学研究科博士課程前期一年）

朝顔の花手折る薫

―『源氏物語』「宿木」巻「今朝のまの」の独詠歌を視点として―

佳作

細田　博子（文学研究科博士課程後期一年）

鯰絵馬に込められた病平癒について

小菅あすか（文学研究科博士課程前期一年）

『源氏物語』六条御息所の最後の手紙

―「白き唐の紙四五枚」と〈連作〉が示すもの―

（所属・学年は、応募当時）

選評

伊藤　涼（文学部中国文学科四年＝平成二十八年度）

何晏の政治観―玄学萌芽を考えるために―

本稿が、学部学生の卒業論文として、優れて意欲的に取り組んだ結果として成ったものであることを先ず喜びたい。卒業論文が本稿のような水準にあることは、この『國學院雑誌』懸賞論文の企図とも一致する点で、本稿は、充分に評価できる労作と言えよう。その論証は、資料を丹念に挙げ読解を積み重ねる着実な形式をとっている。これは、思索を加える第一歩であり、この部分に不安があるものも多い中、本稿は注意深く読み進めていることに好感を持つ。加えて、卒業論文では欠きがちな先行研究への視線も備え、その点においても、誠に穏当な姿勢であることは、評価される。

ただし、問題提起以前の前提に、疑義無しとはしない。何晏の存在を玄学の萌芽として位置付けることに、異論を持つ者はいないであろう。しかし、だからといって、彼が「玄学家」であったり思想家であったりする必然はない。筆者は、「何晏の

思想書」として、当該の『論語集解』を扱いたいようであるが、その結論として提示された「人を選ぶ」とは、果たして「思想」たり得るか、その疑問に答えなければなるまい。

立場としては、玄学すら「思潮」として論じる位置付けもありうる。したがって、「人を選ぶ」とは、見解・視点・提言の次元であって、本対象のように、『論語』に付随する形式を取らざるを得ない古代の学問的見解を、「思想」として論じるに急であってはならないだろう。また、『集解』の宿命的性格とも言える「雑纂」性、すなわち、何晏等編纂者以外に、前時代・他者の見解をも包含せざるを得ない注釈書の扱いは、慎重であらねばならない。もちろん、日本の先行研究を挙げて、その弱点の補強を試みてはいるが、いかに優れた先行研究があるにせよ、この基本的性格は容易に乗り越えられるものではないだろう。

今後に期待されるのは、何晏自身が処刑される災禍を招くような、当時の社会的背景の中にこの言説を還元しても、妥当と思わせるような理解が提案されるべきこと、また、この問題を扱うには、日本よりも中国での豊富な研究成果に言及せざるを得ない事を指摘しておく。

細田　博子（文学研究科博士課程後期一年＝平成二十八年度）

鯰絵馬に込められた病平癒について

本論文は、鯰絵馬の意味内容を検討し、「鯰」の表象的機能について考察したものである。

鯰は、十六世紀末から十七世紀前半以降、地震と結びついて語られ、日本を地震から守るシンボルとして受容されてきた。一七五三年上演の歌舞伎「暫」において、地震を語る鯰坊主が登場、ついで、安政二年十月二日（一八五五年十一月十一日）の安政江戸地震の直後から、錦絵「鯰絵」が出版されて流布し、鯰と地震との関係が周知されていたと認識されている。一方、鯰は、「瘢病」すなわち皮膚病との結びつきについても指摘されている。

論者は、鯰絵馬について、静岡県、岐阜県、奈良県、京都府、大阪府、福井県、兵庫県、三重県、和歌山県、香川県、徳島県、広島県、山口県、佐賀県、大分県、長崎県、福岡県、熊本県、鹿児島県、計19府県の寺社（地蔵を含む）計59件を実地調査し、かつ、各地域の鯰にまつわる民話、伝説、俗信を網羅的に収集して分類し、絵馬の形態、鯰の表現、祈願の内容などを、史料にもとづきながら分析している。実地調査地域が中部から西日

本に限られているとはいえ、緻密な分析による結果は、今後、他地域の実地調査をする上で、きわめて重要な指針となろう。

以上のように、絵馬と史料の精緻な調査と綿密な分析の結果、論者は、鯰絵馬の約7割（84件）は、皮膚病の治癒祈願であることを突き止めた。その皮膚病は「瘢病」と呼称され、訓読みでは鯰と同じくナマズと称し、病状としては、鯰に類似した白色、ないしは暗色の斑点が不規則に、頸、胸部、脇の下などに広がる。この「なまず肌」は痛みや痒みはともなわないものの、とくに女性には大いなる悩みの種であったため、化粧の手引書にも治療法の記載があるという。「はやり病」である天然痘（疱瘡）、麻疹、水疱瘡（水疱）などのように、日常的に体験する皮膚病のひとつとして忌避されていたとする。

本論文は、従来の「鯰＝地震」という表象構造に対し、民間信仰レヴェルの表象体系があったことを浮き彫りにしており、綿密な実地調査と史料研究にもとづく大きな成果と言えよう。

最後に、「鯰」がともにその表象となった地震と瘢病との相関関係については、原因不明の瘢病が、突如として襲う地震への「恐怖」に通じるからではないか、と推測しているが、より詳細な分析が必要であろう。瘢絵馬と鯰絵に関するさらなる研究の進展を期待したい。

小菅あすか（文学研究科博士課程前期一年＝平成二十八年度）

『源氏物語』六条御息所の最後の手紙
―「白き唐の紙四五枚」と〈連作〉が示すもの―

小菅あすか論文は、『源氏物語』「須磨」巻において、須磨に流謫した光源氏と、斎宮として伊勢へ下向した娘に付き添った六条御息所とが交わした手紙の特徴から、「互いの境遇を共感し合うもの」とする従来の論に対して、独自の解釈を付与した点が評価できる。

光源氏が須磨から送った伊勢の六条御息所への手紙の内容は省かれているが、六条御息所からは返信の形で、和歌二首を含む手紙が「白き唐の紙四五枚ばかり」に書かれて、光源氏のもとに届く。その消息文に対して、光源氏も、和歌二首を含む手紙を伊勢へと送る。

こうした消息文の遣り取りの中から、小菅論文は、手紙の形式・内容について、以下の四点に絞って検証を試みる。①〔白い紙〕に六条御息所が返信を認めた理由。②〔唐の紙〕を選んだ意図。③〔四五枚ばかり〕と紙の枚数が示される理由。④〔手紙中の和歌の〈連作〉〕の意図。以上の視点から、須磨の光源氏に送った、六条御息所の手紙に込められた心情を読み取って

いく。

①〔白い紙〕については、光源氏が玉鬘に送った「胡蝶」巻での手紙を初めとする『源氏物語』中の十二例の〔白い紙〕の手紙を検証し、そこには「送り手による懸想心を隠そうとする心情が表出」されていると述べる。②〔唐の紙〕の選択は、光源氏の朧月夜への手紙を初め、『源氏物語』内にある十一例を確認することで、「「唐の紙」には、受け手の心情を慮って、こちらも格別な配慮を示そうという送り手の意図が含まれている」と説く。③〔四五枚ばかり〕との紙数の明示については、『源氏物語』内で手紙の紙の枚数が示されるのは、当該場面と、明石の入道の一族への遺書と、柏木の遺書との三例のみであることを確認した上で、六条御息所の手紙は、他の二例のような遺書ではないが、「書き手の並大抵ではない苦悩や切実な思いが複数枚という分量に表れている」と述べる。④〔手紙中の和歌の〈連作〉〕については、『蜻蛉日記』『栄華物語』の例や、『源氏物語』の柏木の遺書や、死を連想させる浮舟の〈連作〉などから、当該場面での六条御息所の〈連作〉を含む手紙は、遺書に準ずる内容のものと受け取られると説く。

以上の四点からの論述の上に、六条御息所が詠んだ全十一首の和歌全体の内容を確認し、改めて〈連作〉を含む六条御息所の手紙は、「思ひやれ」という語句に象徴されるように光源氏の愛への希求であり、恋に苦悩し続ける「わが身」への理解を求めることにあったと結論づける。

丁寧な読みによって、従来の論の不足を補おうとする姿勢があり、その目指す成果も認められ評価できる。ただし〈連作〉という概念が充分には機能していないこと、先行研究との差異が必ずしも明確でない点があり、それらについて更なる研究の進展を望みたい。

平成二十九年度　國學院雑誌学生懸賞論文募集

一、応募資格：第一部門（本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者）
　　第二部門（大学院文学研究科・専攻科在籍者）
一、枚　　数：四〇〇字詰四〇枚～五〇枚以内
一、テ　ー　マ：題目は問わない。
　　但し、未発表学術論文に限る（卒業論文も可）
一、締　切　日：平成三十年三月末日（当日消印有効）
一、入　　選：賞状ならびに副賞（五万円）
　　佳　　作：賞状ならびに副賞（三万円）
詳しくは本誌表紙裏面を参照